

第八章 天下人の直轄地

第三節 天下分けめの戦い

会津攻めと石田三成の挙兵

慶長三年（一五九八）に豊臣秀吉が幼い秀頼を残して病死すると、豊臣政権内部の動揺は大きくなった。五大老筆頭の徳川家康はしだいに政局の主導権を握った。慶長五年六月家康は、大老の一人陸奥会津城主上杉景勝（謙信の養子、当時一二〇万石領有）に反逆の企図ありとして、諸大名を率いて大坂を出陣し、会津に向かった。

清須城主福島正則、黒田城主一柳直盛といった尾張の大名のほか、兼松又四郎正吉、中村又蔵元勝といった「尾張衆」からも従軍した者がいた。兼松正吉の場合、七月一日以降に、人数四〇人、馬三疋で大坂を出発し、東海道の路次で沿道諸大名より兵糧・馬飼料として米・大豆を支給されて、関東へ向かったと思われる（兼松文書）。尾張熱田では、清須城主福島正則が兵糧支給の責任者であったことが注目される。なお、後述するように、尾張衆の大半は従軍せずに尾張国内にとどまっており、兼松・中村の二人のみ会津攻めに動員された理由は明らかではない。

徳川家康が会津攻めに出陣したのに乗じて、石田三成は、大老の一人である安芸広島城主毛利輝元を盟主として大坂城に迎え入れ、諸大名に家康打倒を呼びかけ、兵をあげた。八月一日に、三成ら西軍は伏見城を攻略し、家康の武将鳥居元忠・松平家忠らを敗死させた。さらに、家康方を迎え撃つため、美濃・伊勢に進出した。

石田三成らの挙兵を知った徳川家康は、六月二五日に下野小山（栃木県小山市）で会津攻めに参加した諸大名を集めて会議を開いたが、福島正則の提唱により、正則ら豊臣恩顧の諸大名は家康に味方して三成らを討つことを決めた。正則ら豊臣恩顧の諸大名は、先発して東海道を進むこととなった。家康は、軍監として本多忠勝を同行させた。その際、遠江掛川城主山内一豊の提案により、東海道筋の諸大名は家康にその居城を引き渡すこととなり、徳川譜代の部将らが駿河沼津城から尾張清須城までの諸城に配置されることとなった。

ここで、問題となるのは、徳川家康の四男松平忠吉の役割である。新井白石は、忠吉が井伊直政・本多忠勝に補佐されて、東海道の先手の大将に起用されたと推定した（『藩翰譜』）。しかし、後述する岐阜城攻めまでの先手の動静をめぐる同時代史料の中に、忠吉の名がみえないことから、先手大将としての忠吉の役割を疑問視する考えもある（笠谷和比古説）。しかし、慶長五年（一六〇〇）と推定される八月二日付の徳川秀忠の書状（徳川美術館所蔵）によれば、東海道を先行して駿河に着いた忠吉からの書状を受け取っている。正則ら先手の諸将が、江戸を立つのは八月一日ごろである。また、石川正西の「聞見集」によれば、忠吉が最初駿府城の城番に当てられ、その後井伊直政の進言にて西上を家康から命ぜられたとある。史料的制約からこの問題は確定しにくいだが、先手の諸大名より遅れて、徳川勢の先勢として井伊直政が西上する際に、その婿である忠吉を駿河から同行させた可能性があると考えられる。

また、徳川家康の三男秀忠は、東山道（中山道）を譜代の諸将・信濃の大名ら（計三万八〇〇〇）と進み、美濃で合流する予定であった。二男結城秀康（一五七四～一六〇七）は下野宇都宮に残って、関東・奥羽の大名らの協力を得て、上杉景勝に対する押さえとなった。家康の子らが、名目上とはいえ、諸大名を率いる諸軍の大將に起用されたことは、秀吉が天下統一の戦いの際に、一族の秀長、秀次らを諸軍の大將に起用した例にならったものといえる。家康は、今度の戦いを、「徳川氏の下での戦い」とするための政治的布石を打ったのである。

第八章 天下人の直轄地

第三節 天下分けめの戦い

尾張衆らの去就

この間、石田三成らの西軍は、美濃・伊勢まで進んできており、尾張国内へも西軍への加担が働きかけられたと推測される。福島正則・一柳直盛らの会津攻め従軍の諸大名が東軍に参加を決めたといっても、豊臣氏の直臣という立場にある尾張衆らが、豊臣秀頼の名による西軍側の呼びかけに、自分らの去就の判断に迷うこともあったと想像される。とくに、岐阜城主織田秀信（岐阜中納言）が西軍に参加した影響は大きかった。秀信が、中小大名の多い尾張北部・美濃において、一三万余石の有力大名であっただけではなく、織田信長の嫡孫（幼名三法師）という重みがあり、その有力家臣も尾張・美濃に縁者を持つ者が少なくなかったため、尾張・美濃の武士らの去就に及ぼした影響は大きかった。濃尾国境の諸領主のうち、犬山城主石川光吉（一万二〇〇〇石）、竹鼻城主杉浦直勝、田口宗勝（一万八〇〇〇石）、稲葉定通・典通父子らが西軍に参加した。犬山城には、援軍として稲葉父子や竹中重門・加藤貞泰らの美濃衆が配置された。

石田三成ら西軍の作戦構想は、美濃・尾張を確保して、西上する徳川家康勢を迎え撃つというものであったと伝えられている。その際には、尾張清須城を手中に入れることが不可欠であったはずで、三成らが、福島正則が残した清須城代に西軍への加担を働きかけたとみられる。しかし、結果としては、城主福島正則が率いる主力が出陣中で、少数の留守勢しか残っていなかったにもかかわらず、清須城は西軍の手に落ちることはなかった。

また、尾張衆の中から、西軍に加担したものは伝えられていない。生駒家の家伝によれば、丹羽郡小折城主生駒八右衛門家長・隼人正利豊父子は、日ごろから福島正則と親しく、会津攻めに従軍する正則から清須城の留守を頼まれていたので、西軍方の誘いにもかかわらず、妻子を人質として同行し、清須城に入城したと伝えられる（『生駒宗直物語』）。森勘解由・林藤十郎・阿比子善十郎・沢井左衛門尉・稲熊市左衛門尉らも清須城に籠城したと伝えられ、他の尾張衆も後述するように、福島正則の与力として岐阜城攻めから関ヶ原の戦いまで行動を共にしている。こうした尾張衆と正則の関係が、正則が清須城主となって以来の寄親・寄子的な指揮系統に基づくものか、慶長五年（一六〇〇）段階に生み出されてきたものによるのかは確定できていない。いずれにしても、尾張国内においては、福島正則の勢威は大きく、正則の東軍への加担が決定的な意味を持ったといえよう。

慶長三年の豊臣秀吉の死後から、同五年の関ヶ原の戦いにかけて、尾張国内における福島正則の影響力が強まるのは、熱田の場合にも見られる。慶長四年（慶長五年説もある）七月五日に、「西加藤隼人と名乗り、図書（東加藤家）より富けり、福島左衛門大夫（正則）国務の時に、意に合ざる事有り、誅しなる」（『厚覧草』）とあるように、西加藤家当主加藤景延が福島正則と対立して殺害され、東加藤家嫡男又八郎武公（順政の長男）も投獄されるという事件が起きた。この事件の詳細は不明であるが、戦国以来熱田に勢力を持つ加藤氏一族と、熱田に対する影響力を強めようとした正則との、政治的な対立が原因と想像される。それにしても、秀吉から熱田の支配を委ねられ、知行を給与されていた加藤景延を、正則の専断で裁くことはできないはずであるが、秀吉死後の豊臣政権は、正則を抑えることができなかったのであろうか。ただし、投獄された武公は三〇日余で出獄できて東加藤家にはそれ以上の処置はなされず、西加藤家についても、残された景延の子弟が、秀吉からの給地を含めた財産を相続することは許された。なお、景延死後の家督について、その長男喜左衛門宗弘とする意向を正則が示しており、熱田に対する正則の影響力は、この事件を経て、さらに強められたことがうかがえる。

第八章 天下人の直轄地

第三節 天下分けめの戦い

関ヶ原の戦い

さて、慶長五年（一六〇〇）八月一四日までに、福島正則ら先手の豊臣恩顧の諸大名らは尾張清須城に到着し、同二日に木曾川上流の河田と、下流の起と二手に分かれて、木曾川を渡り、岐阜城を目指すこととなった。河田に向かった池田輝政らの諸勢は、黒田城主一柳直盛の案内で渡河し、迎え撃った岐阜城主織田秀信の軍勢は敗れて岐阜城へ引きこもった。福島正則らの諸勢は起に向かったが、清須城に籠城していた生駒利重ら、会津攻めから正則とともに帰国した中村元勝ら、その他の沢井雄重・津田新十郎正盛らの尾張衆がこぞって先鋒正則に同行している。彼らは、勝手知る土地柄で川舟などを集めて、諸勢は木曾川を渡り、竹鼻城を攻略して、岐阜城へ向かった。岐阜城外で合流した東軍諸勢は八月二三日には岐阜城を攻略した。降伏した城主織田秀信は、助命されて、のちに高野山に登ることとなる。岐阜落城を知って、犬山城は戦意なく降伏し、西軍方に逃れた城主石川光吉を除く、籠城諸勢は東軍方に参加することになるなど、岐阜城攻略は、尾張北部・美濃にかけて東西両軍の動向に大きな影響を与えた。翌二四日に東軍諸勢は、西進して、西軍の拠点大垣城と対峙する赤坂に陣を構えた。この報をうけて、家康の本軍三万は九月一日に江戸を出発し、一四日に先発隊と合流した。同夜東軍が直接近江・大坂へ向かう計画を知った西軍は関ヶ原に移動し、東軍もこれを追った。

九月一五日早朝、関ヶ原周辺には、東軍約一〇万、西軍約八万が布陣していた。井伊直政・松平忠吉は、戦いの先駆は徳川氏であるべきと、先鋒に予定されていた福島正則の陣の脇を抜け、敵前を出て西軍を銃撃した。これが契機となって、辰の刻（午前八時ごろ）東西両軍の戦闘が開始された。忠吉の供廻りは、富永直次ら小姓と、朝岡重常・重政父子らの歴戦の武士から選ばれた者たちわずか二四騎であった。松平忠吉と井伊直政が、抜け駆けともいえる強引な行動に出なければならなかったのは、徳川氏の主力を率いる秀忠がまだ到着せず、豊臣恩顧の諸大名に頼らざるを得ない家康の苦衷を察し、東海道先手の大将として合戦の先駆を演じることで、徳川氏の面目を保とうと考えたからであるとされる（笠谷和比古説）。

松平忠吉らの抜け駆けを知った福島正則は、すぐに鉄砲足軽らに西軍方の宇喜多秀家勢を射撃させた。そののち、福島勢は宇喜多勢と激突して、一進一退の戦いを展開した。生駒家の家伝などによれば、生駒利豊（露月）らの尾張衆三十余名は、福島勢の先手に加わって宇喜多勢へ突撃し、利豊は宇喜多家の小姓頭足立勘十郎を討ち捕ったが、森勘解由は鉄砲に撃たれて戦死したと伝えられる（『生駒宗直物語』）。忠吉が抜け駆けして残された忠吉本隊（約三〇〇〇）は、家老小笠原吉次・富永忠兼に率いられて、西軍島津義弘勢に向かった。島津勢が陣から出ず、積極的に戦おうとしなかったため、忠吉本隊の損害は少なかった。

西軍方の諸勢のうち積極的に戦ったのは石田三成ら一部に限られ、劣勢ながらも奮戦して激戦が続いた。しかし、東軍方に内応していた吉川広家によって、南宮山の毛利秀元らの諸勢三万余は動けず、松尾山の小早川秀秋（兵力一万五〇〇〇）が東軍に寝返って、脇坂安治らの諸勢とともに西軍を攻撃したため、未の刻（午後二時ごろ）には西軍は総崩れとなった。唯一残った島津勢（兵力約一五〇〇）は、伊勢方面へ退路を求めて、家康本陣の脇を突破して南へ逃れた。東軍諸勢は追撃し、とくに井伊直政・松平忠吉は、先頭をかけて活躍し、この追撃戦で兩人とも負傷した。

関ヶ原の戦いの結果、敗北した西軍の諸大名は処罰され、政権は徳川家康に帰することになった。その勝利は、家康が豊臣恩顧の諸大名のうち、福島正則ら反三成派を味方につけたことが大きかった。彼らは戦後の論功行賞で、西軍諸大名からの没収地による大幅な加増を得た。

第八章 天下人の直轄地

第三節 天下分けめの戦い

尾張における戦後処理

尾張国内においても、関ヶ原戦後の諸大名の変動は非常に大きかった。豊臣政権下の諸大名の変動は以下のとおりである。

犬山城主石川光吉（貞清説も。一万二〇〇〇石）	西軍方として没収
黒田城主一柳直盛（三万五〇〇〇石）	伊勢神戸城主（五万石）へ
清須城主福島正則（二〇万石、二四万石説も）	安芸広島城主 （四九万八〇〇〇石）へ
長島城主福島正頼（一万石）	大和松山城主（三万石）へ

こうして、正則ら豊臣恩顧の諸大名が去ったのちには、清須城には徳川家康四男松平忠吉が武蔵忍城（一〇万石）から移り、犬山城には小笠原吉次（一万石）、黒田城には富永忠兼（六〇〇〇石）という、忠吉の家老たちが支城主として入った。当時は尾張国海西郡に含まれていた長島城には、菅沼定仍が上野阿保（現在地未詳）一万石から移って、二万石を与えられた。その二万石のうち、一万三三五石余が海西郡南部に属した（菅沼家文書）。また、海西郡北部の赤目（海部郡八開村）の横井氏は、当主以下一族の多くが徳川家康に仕え、忠吉には属していない。したがって、海西郡は忠吉には与えられなかったのである。また、海西郡に隣接する中島郡西南部の祖父江（中島郡祖父江町）などの地も、慶長一三年（一六〇八）の備前検では横井氏一族の本領として除地となっているので、中島郡の一部も忠吉領には含まれなかった可能性が強い。

知多郡についても、福島正頼が預かった豊臣氏蔵入地の一〇万石（『寛政重修諸家譜』）が、関ヶ原戦後には徳川氏の蔵入地となったものと考えられる。同郡内には、水野分長が一族の故地小川（知多郡東浦町）で九八二〇石、水野（戸田）光康が故地河和村一四六〇石、千賀氏一族が故地師崎等で一五〇〇石の領地を、徳川家康から与えられている（『寛政重修諸家譜』『士林浜潤』）。三氏とも戦国期以来の知多水軍の伝統を持つ一族であることが注目される。また、慶長八年九月に家康は、同郡の蔵入地から荒尾掛村のうち一四三石余を、熱田東加藤家の図書助順世に給与している。

以上の事実からみれば、尾張における松平忠吉の領地は、一般にいわれているように、尾張一国を与えられたのではないことが理解されよう。その知行高が、五二万石（五七万七二〇石とも）と伝えられているが、その根拠は不正確である。忠吉の領国は、尾張八郡（豊臣期の検地高五七万七三七石）のうち、知多郡（一〇万石）・海西郡、および中島郡の一部を除いたものとなる。こうした領国の状況は、前代までの領有関係、さらには尾張国内の各地域ごとのまとまりに影響された結果と思われる、のちの徳川義直の尾張一円領国化に至る、過渡的な段階と位置づけられよう。

関ヶ原戦後、徳川家康は、徳川氏直轄領を四〇〇万石に増やし、一門・部将（譜代）六八名を大名に取り立てたが、一門・譜代は基本的に関東・東海・甲信といった旧徳川氏領国に配置された。西国には有力な豊臣恩顧の諸大名が集まっており、さらに毛利・島津氏などの旧族大名が残っていた。そこで、京都の朝廷や、大坂城の豊臣秀頼の存在が重要になってくる。

徳川家康は、外様ながら女婿の池田輝政に播磨姫路五二万石を与えて、中国以西の豊臣恩顧の諸大名への抑えとし、他方、京より東には、近江佐和山（一八万石）に井伊直政、美濃加納（六万石）に奥平信昌（家康女婿）、同大垣（五万石）に石川康通、尾張清須に忠吉、伊勢桑名（一〇万石）に本多忠勝、そして、越前北庄（六七万石）に家康二男結城秀康といった一門・譜代が配置された。このうち、直政・信昌・忠吉・忠勝は関ヶ原の戦いに参加しており、康通も合戦当時、福島正則の居城だった清須の城番を務めたという関係にあった。とくに、忠吉は、井伊直政の女婿でもあり、井伊の赤備えは有名だが、忠吉の率いる東条松平家譜代家臣団（甚太郎衆）も歴戦の軍団であって、関ヶ原の戦いの関係そのままに、京都・大坂方面への軍事的な抑えとして配置されたと考えられる。さらに、後述するように、忠吉は、京都・大坂での政治的役割も期待されていた。

第八章 天下人の直轄地

第三節 天下分けめの戦い

中小領主たちへの影響

関ヶ原戦後に、諸大名の改易・転封が大規模に実施されることで、豊臣秀吉から知行を給与されていた中小領主も影響を被った。

猶以って御朱印早速御取り有るべく候、以上、

貴所御知行百五十五石の分、当成ヶ西隠岐（西尾吉次）殿御請の間、御所務有るべく候、若し百姓違乱申し候はば、此一書御見せ有るべき由候、以上、

子十二月廿七日 伊備（印）
（花押）

加藤又八殿

関ヶ原戦後の大規模な改易・転封による在地の混乱を防止するため、徳川氏の代官伊奈備前守忠次は、東海地方の寺社等に対し、領地や年貢の安堵を家康の意をうけて行っており、熱田東加藤家の又八郎武公の場合も、右の忠次書状によって、知行一五五石の慶長五年分の年貢をとりあえず保証されたようにみえる。しかし、東加藤家の家伝によれば、この年貢は納入されず、三河高橋郡のあらみ村・一色村は、本多豊後守の知行に、尾張中島郡西光坊は松平忠吉の知行に編入されてしまい、加藤武公は、新しい領主からその知行を安堵されなかった。

西加藤家の場合、加藤景延死後の家督について未決定であり、関ヶ原戦後に安芸広島へ転封することになった福島正則は、新たに清須城主となった松平忠吉の家老小笠原忠次・富永忠兼に家督の件を引き継がせた。しかし、景延の子息らに家督をめぐる訴訟が生じたため、忠吉は西加藤家の知行一五五石余を熱田奉行浅井庄三郎に公事落着まで預からせたが、慶長九年に長男宗弘に家督が決定しても、同知行は西加藤家へ返されず、結果的に同家は景延死後その知行を失うことになった。ただ、東加藤家の場合、武公の子順世が、慶長八年九月に伏見城で家康に会い、人質となった家康への忠節（第六章第五節）の代償として、新たに知多郡荒尾掛村のうちで一四三石余を給与されたのである。熱田加藤氏にとって、その知行給与面で関ヶ原の戦いを境に一つの断絶を経験したといえる。それには、「熱田地仕置」（熱田代官）という職務においても、西加藤家の場合、景延の死去によりその職務から離れ、東加藤家の場合も、その系譜類によれば、武公の代にその職務を辞したと伝え、伝存文書からみても、武公の子順世の代にその活動は終わることと関係がある。

関ヶ原戦後の変動を物語る、もう一つの事例として、生駒隼人正利豊ら、尾張衆の処遇について紹介する。尾張の大半が清須城主松平忠吉によって領有されることになったので、尾張国内に知行を持つ尾張衆の処遇が問題となった。大坂城に豊臣秀頼は健在であり、生駒利豊らの豊臣氏の直臣としての立場は、関ヶ原戦後も存続していたはずである。他国に替地を与えられて、豊臣氏に引き続き仕える者（大坂衆）となる途もあったと思われるが、徳川家康の命により、利豊ら尾張衆は清須城主松平忠吉に付属されて、その旧領を忠吉から安堵された。生駒家の家伝によれば、生駒利豊・兼松正吉らが関ヶ原戦後に大坂に詰めていると、清須城主となった忠吉が使者を派遣して、利豊・正吉・林藤十郎・阿比子善十郎四人を仕えさせたいとの希望を家康に伝えたので、家康は中村元勝も加えた五人を忠吉に付属させることにした。他の尾張衆も、旧領を離れずに忠吉に仕えることになったという（『生駒宗直物語』）。豊臣秀頼の存在について触れられていないなどのあいまいな点もみられるが、豊臣氏の直臣であった尾張衆を忠吉に付属させるために、徳川氏にとってそれなりの手続きが必要であったことをうかがわせる記述である。なお、尾張衆とは「秀頼の馬廻り分の内、尾張国付の輩」（『生駒宗直物語』）を指すのであって、同じく尾張国出身であっても秀頼の馬廻り一般については自ずと問題は別になったであろう。関ヶ原戦後の、大規模な改易・転封にともなって、尾張国内でどのような具体的な処置が実施され、その結果がどうなったかまで明らかにされた事例は多くなく、その全体像を明らかにするのは、今後の課題といえよう。

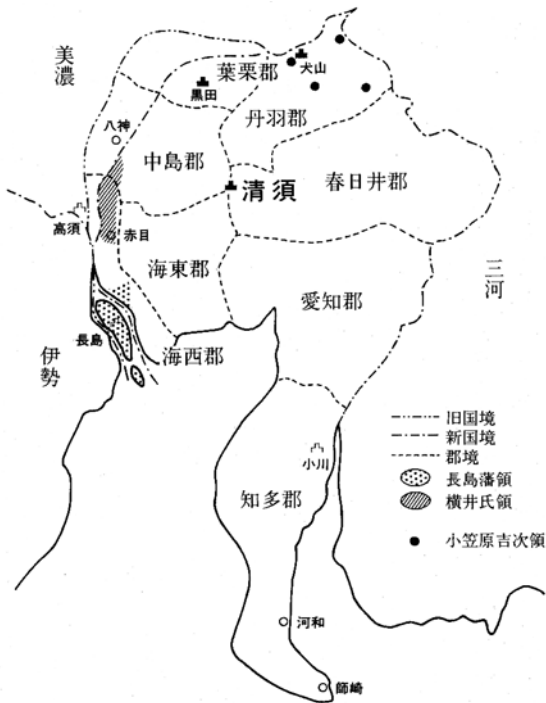


図8-3 松平忠吉領国関係図

(郡境は江戸期のものに依拠。名古屋市博物館特別展図録「尾張清須城主松平忠吉」より一部加筆)